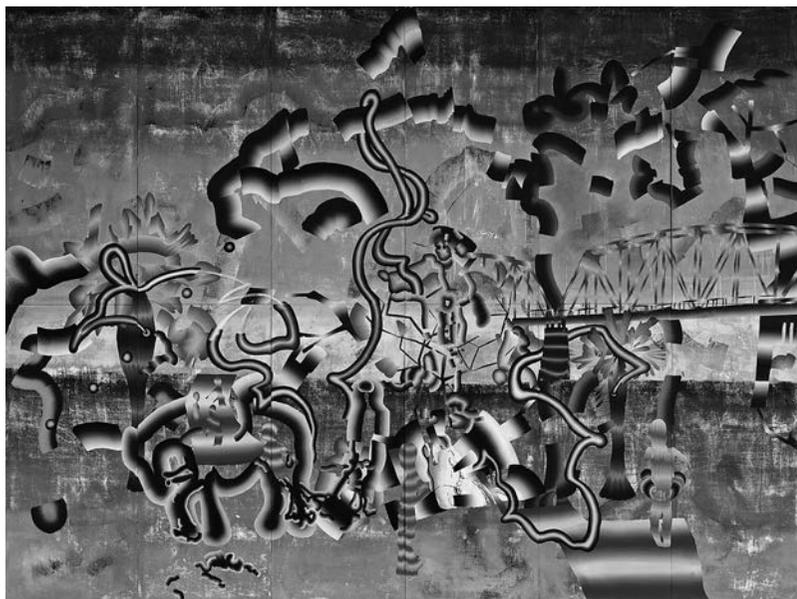


福岡の現代美術、九州派以後

Art after “Kyushu-ha” in Fukuoka

会期 2019年8月27日|火|-10月27日|日|

会場 近現代美術室 B



浦川大志《Saida-wo nominagara tochi wo aruku.》2017年

1968年、福岡県文化会館（現・福岡県立美術館）で開催された「グループ連合による芸術の可能性」展にあわせ発行された雑誌『批評』第1号において、福岡の前衛美術グループ・九州派は、参加グループの美術家たちに向けて、挑戦状という名の問いを發しています。

- 一、あなた（または貴グループ）は何故、九州にいて前衛作家たらんとしているのですか。
- 一、あなた（貴グループ）は、将来も九州にとどまるつもりですか。
- 一、あなた（貴グループ）の絵画理論および主張を貴グループあるいは個人の資格で実績と結びつけて説明して下さい。
- 一、あなた（貴グループ）は九州にて前衛一芸術集団が開花することを信じますか。
- 一、あなたはなにによって今あるいは将来生計を得ようと欲していますか。

1950年代後半、福岡に生まれた九州派は既存の美術システムに抗いながら、地方対中央（東京）を意識し、数々の展覧会やイベントを企画・参加し、1960年代後半にその活動を終えます。「グループ連合による芸術の可能性」展は、九州派がその名で参加した最後の展覧会でした。同展参加者は必ずしも九州派の後進とは限りませんでしたが、ここで發せられた問いかけは、九州派の後に続く美術家たちへのメッセージとしても読めるものでしょう。

本展では、九州派以後の福岡の現代美術を当館のコレクションによって振り返ります。九州派の活動が終息する1960年代後半から現在までの間、福岡は多くの美術家や美術グループを輩出しました。彼・彼女たちは、その状況に相対し、奮闘し、いくつものムーブメントを作り出しました。限られた空間で、当館のコレクションのみで、およそ50年間にわたる福岡の現代美術の全貌を捉えるのは到底不可能なことです。しかしながらその一端を紹介することで、当時の福岡の美術家そしてアートシーンの熱を感じ、現状を見つめなおせば幸いです。



〒810-0051

福岡市中央区大濠公園1-6

TEL 092-714-6051 (代表)

FAX 092-714-6071

www.fukuoka-art-museum.jp

※記載は作者名、題名(日英)、制作年、技法または材質(日英)、寸法(縦×横cm)、当館分類番号、主な出品歴の順。※資料はその限りではない。

資料

- ・「グループ連合による芸術の可能性」展ポスター(1968年4-5月)、絵=オチオサム
- ・「批評」第1号、特集:グループ連合による芸術の可能性(1968年5月1日発行)
- ・「蜘蛛集団のアート・フェア」パンフレット(1968年7月頃)
- ・「蜘蛛宣言」ピラ(1968年11-12月)、デザイン=春元茂人、文=森山安英、加藤勲
- ・「蜘蛛宣言」カード(1968年11-12月)、デザイン=加藤勲
- ・「自らの日常性を告発せよ」ピラ(1970年2月頃)

1-3. 集団蜘蛛 Group “Kumo”

「グループ連合による芸術の可能性」開催前に、1968年4月北九州の若手作家を中心に「グループZELLE(ツェル)」が結成。上記展覧会後、当時毎日新聞の記者だった田中幸人が加入し、田中の命名で「集団蜘蛛」と改称する。「第2回企画展 集団蜘蛛蜂起」(北九州市立八幡美術館)後、公募展に出品したメンバーの除名・退会が続ぎ、加藤勲、春元茂人、森山安英の3名が残る。同年11-12月頃「蜘蛛宣言」。菊畑茂久馬が事務局長を務めた「第3回九州・現代美術の動向展」(福岡県文化会館)や「万博破壊九州大会」(戸畑文化ホール)、「可能性への意志」(北九州市立八幡美術館)等に参加。展覧会それ自体の粉砕を目的とした、サディスティックな演出やエロスを題材とするハプニングを行う。1969年春元脱退、1970年加藤脱退。同年、森山は県立伝習館高校の3教師の処分に抗議する「伝習館救援会結成大会デモ」に参加。男女の性器を描いた旗を掲げた「わいせつ図画公然陳列罪」で逮捕される。12日間の拘留後、本件は芸術をめぐる規制の問題ともリンクし、2年間裁判が続いた。森山が率いた「集団蜘蛛」の活動は、「反対のための反対、表現としての反対」を指針に、美術館や展覧会といった制度、反万博運動等の政治運動に批判的に介入しながら、より大きなシステムを問題としていた点で、それ以前・それ以後の美術集団や美術家とも異なる、稀有なものであった。

1 集団蜘蛛ポर्टレート 森山安英

Portrait of Group "Kumo": MORIYAMA Yasuhide
1969
シルクスクリン・紙
silkscreen on paper
199.6x99.7 1-E-928 作家寄贈
1969年「第3回九州・現代美術の動向展」(福岡県文化会館)

2 集団蜘蛛ポर्टレート 春元茂人

Portrait of Group "Kumo": HARUMOTO Shigeto
1969
シルクスクリン・紙
silkscreen on paper
199.9x100.5
1-E-929 作家寄贈
1969年「第3回九州・現代美術の動向展」(福岡県文化会館)

3 集団蜘蛛ポर्टレート 加藤勲

Portrait of Group "Kumo": KATO Isao
1969
シルクスクリン・紙
silkscreen on paper
199.8x100.5 1-E-930 作家寄贈
1969年「第3回九州・現代美術の動向展」(福岡県文化会館)

4. 小松豊 KOMATSU Yutaka

1940年福岡県北九州市に生まれる。1964年浪速短期大学卒業。同年「第2回朝日賞全九州・山口油絵コンクール展」(北九州市立八幡美術館)で朝日準賞受賞、「第8回シェル美術賞展」で二等賞受賞。1965年「第8回日本国際美術展」招待出品。1967-69年「九州・現代美術の動向展」(福岡県文化会館)に出品。1970、72、73年「可能性への意志」(北九州市立八幡美術館)に選抜出品。1984年松本芳年率いる「九州制作会議」に参加し、同年の第1回展より毎回出品。2007年北九州市立美術館にて回顧展。絵画空間における二次元性と三次元性を主題に、知的でユーモアのある絵画や立体を制作。

4 凹→凸へ移向する空間

Space in Transit between Concavity and Convex
1967
油彩・画布
oil on canvas
84.5x84.5x25.0 1-A-645
1967年「九州・現代美術の動向展」(福岡県文化会館)

5. 酒井忠臣 SAKAI Tadaomi

1946年中国大連に生まれる。1947年引き揚げ。宮崎県、千葉県で育ち、1969年武蔵野美術大学造形学部を卒業、造形専攻科に進学。1970年より2012年まで九州産業大学芸術学部で教鞭を執る。1972年初個展(福岡アメリカンセンター)。1974年「可能性への意志」展(北九州市立八幡美術館)、1978年北九州絵画ビエンナーレ(北九州市立美術館)、1980年「アジア現代美術展」(当館)、1985年「現代美術の展望-’85FUKUOKA 変貌するイマジネーション」(福岡県立美術館)出品。2008年より2011年まで「共同アトリエ・3号倉庫」(福岡市那の津)の総合アートディレクターを務めた。墨絵を思わせる黒の中に空間の広がりを目指す。

5 絵画 III

Painting III
1977
アクリル・画布
acrylic on canvas
260.8x162.0 1-A-666 作家寄贈
1977年「17人による白の空間展」(福岡県文化会館)

6. 山崎直秀 YAMAZAKI Naohide

1955年熊本県に生まれる。1977年九州産業大学芸術学部デザイン科卒業、同校大学院芸術研究科修了。言葉や概念に内在する問題をテーマとしたコンセプチュアルな作品を発表。1975年「WORK PARTY STUDIO」結成に参加。1980年「方法の意志」に参加。1981年「明日への造形—九州 第1回展」(当館)、1985年「変貌するイマジネーション」

(福岡県立美術館)に出品。コンクール展への出品も多く、1988年「第7回現代版画コンクール」(優秀賞受賞)、「イビザ国際版画ビエンナーレ」(スペイン)、「クラコウ国際版画ビエンナーレ」(ポーランド)、など出品多数。現在、和歌山大学教育学部教授。

6 意味-物質

Meaning - Material
1981
写真(パネル貼り)
photo (mounted on board)
各43.0x53.0 1-E-995
1981年「方法の意志II」(当館市民ギャラリー)

資 料

- ・「ゾディアック」ポスター(1977年4月-1978年4月)
- ・新聞記事「若い力の足音 オーバーヘッド展から」(治)、フクニチ新聞(1977年4月13日)複写

7. 長谷川 清 HASEGAWA Kiyoshi

1948年福岡県嘉穂郡に生まれる。九州産業大学芸術学部在学中の1969-70年、学園民主化闘争に関わり、学内の自主講座等を試みる。1970年同大卒業。1972年京都に移り、1975年福岡市で制作活動を開始。1976-78年「今日的美術展」(福岡県文化会館)に出品し、「アーティストユニオン」の活動に関わる。1976年「スイッチ・オブ・テン」(サン画廊)、「アート・イン」(ギャラリーふくだ)に出品。翌年「ゾディアック」結成。中心作家の1人として4回連続展すべてに出品。同年山内重太郎企画による「17人による白の空間展」(福岡県文化会館)に出品。「ゾディアック」以降は美術活動から離れ、埼玉県で医学教育模型制作に従事。2015年埼玉県で死去。

7 テレビジョン' 77

Television '77
1977
NECOプリント、散弾・画布
NECO print and shot on canvas
122.5x155.2 1-A-652 個人寄贈
1977年「ゾディアック展」(福岡市アートギャラリー)

8. 村上 勝 MURAKAMI Katsu

1947年福岡県行橋市に生まれる。北九州大学外国語学部卒業。東京の企業に勤めるが、やがて福岡市に移り、1973年より作家活動を開始。1977年「ゾディアック」結成。数多くの個展を開催する一方でさまざまなグループ展を企画。九州派解散以後弛緩した福岡の美術状況を活性化し、現代美術シーンを牽引する役割を担った。1994年「七つの対話展」(福岡県立美術館)、2000年「第1回21世紀の作家—福岡村上勝展」(当館)出品。2011年小川幸一との二人展「交差する異次元—胎動から躍動へ」(田川市美術館)。「絵画」を成立させる要素を探索した幾何学的な抽象絵画から、1980年代には立体作品に移行、1992年には羽状オブジェのインスタレーションへと展開した。1991年グループ「Mixed Messages」を結成し展覧会も精力的に開催。2015年福岡県で死去。

8 Gold Metallic (1)

木、大豆、糸、塗料・板
wood, bean, string and print on board
280,0x186,3x11,8 1-A-491
1977年「ゾディアック展」(福岡市アートギャラリー)

9. 10. 小川 幸一 OGAWA Koichi

1950年福岡市に生まれる。1974年多摩美術大学デザイン科卒業。1976年「アート・イン」展(ギャラリーふくだ)出品。1977年「ゾディアック」結成に参加。翌年「版画教室」(IAF芸術研究室)に参加。1981年以降グループ活動から離れる。1985年「第2回アジア美術展」(当館)に出品。1989年「第3回アジア美術展」(当館)版画ワークショップに参加。1991年「リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」(スロベニア)でスコピエ近代美術館賞を受賞。1996年福岡市民会館大ホール緞帳原画を担当。2007年福岡市文化賞受賞。2011年村上勝との二人展「交差する異次元—胎動から躍動へ」(田川市美術館)。卓越したシルクスクリーン技術を駆使し、球体や原石をモチーフとした浮遊感と生命力に溢れる版画を制作。

9 十方世界

The Whole World
1975
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
50,3x64,8 1-E-982 個人寄贈
1976年「アート・イン」(ギャラリーふくだ)

10 赤い精霊

Red Spirits
1977
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
64,6x56,2 1-E-989 個人寄贈
1978年「ゾディアック展」(福岡市アートギャラリー)

11. 木塚 忠広 KIZUKA Tadahiro

1948年福岡県久留米市に生まれる。1971年九州産業大学芸術学部卒業。1976年「スイッチ・オブ・テン」(サン画廊)に出品。1977年「ゾディアック」結成に参加し、同グループのすべて展覧会に参加。翌年「版画教室」(IAF芸術研究室)の活動に加わり、翌年「現代美術研究会」を立案。1978年「〈存在・意識〉展」(石橋美術館)をはじめ多数のグループ展に参加。1984年「スクランブル・プラン」(福永アバート)参加。1986年「多様性の構築・展」を企画、出品。1987年「ARTIST'S NETWORK EXPANDED」(福岡県立美術館)、1990年「ミュージアム・シティ・天神」。1988、2015年個展開催(当館特別展示室B)。絵画空間の虚構性を意識した平面・立体作品を制作してきた。久留米市で「PAF絵画教室」を主宰、「アートスペース千代福」を共同運営。

11 シスターボーイ

Sister Boy
1978
鉛、油彩、アクリル、木、鏡、画布
led, oil, acrylic, wood, mirror, canvas
122,5x154,0x39,8 1-G-85 個人寄贈
1978年「ゾディアック展」(福岡市アートギャラリー)

12. 小山 正 OYAMA Tadashi

1949年福岡県北九州市に生まれる。1970年「九州野外彫刻展」(須崎公園)に出品。1972、73年個展(福岡県文化会館)。1974年「九州現代美術『情念と幻想』」(同)に出品。1976年「スイッチ・オブ・テン」(サン画廊/福岡市)

を企画、出品。1976-77年パリ滞在。1982年「明日への造形—九州 第2回展」(当館)、翌年「第2回バンガラデシュ・ビエンナーレ」に出品。1986年米政府の招待で渡米。1987-89年ソウルに滞在。90年代より韓国作家との交流を深め、合同展も多数企画開催。ユーモラスなイメージにさまざまな寓意と象徴を込めた絵画を描く。近年はイメージを重ね合わせて緊密な構成の絵画を制作。

12 手の残像

Afterimage of Hand

1982

油彩・画布

oil on canvas

227.3x181.8 1-A-642

1983年 第2回バンガラデシュ・ビエンナーレ

13. 14. 川原田 徹 KAWAHARADA Toru

1944年鹿児島市に生まれる。1946年門司市に転居、今日に至る。1969年東京大学文学部美術史専修課程中退。門司に帰り我流でペン画を続けて油絵を描き始める。1976年洋画家・平野遼の進めで銅版画を学び始める。1979年サンシャイン版画グランプリ展で銅版画大賞受賞。その後も主要な版画展などで受賞を重ねる。1982年「第4回明日への造形・九州」、1985年「第2回アジア美術展」(いずれも当館)に出品。1992年「大人類研究所 カボチャドキヤ」を設立、2001年には「カボチャドキヤ国立美術館」を開館、館長に就任。2004年北九州市立美術館分館で回顧展「トーマス・カボチャラダムのゆかいな王国展」。かぼちゃやバベルの塔を主なモチーフに、自然との共存、人間の愚かさを細密な描写で訴える。

13 螺旋状の構造を持つSt.Gallen

St. Galle with a Spiral Structure

1977

エッチング・紙

etching on paper

36.0x29.5 1-E-908

1979年個展(77ギャラリー)

14 貧者のバベル

Poor's Babel

1985

エッチング・紙

etching on paper

36.3x39.6 1-E-916

1985年 第2回アジア美術展(当館)

資料

- ・「スクランブル・プラン」記録集ジャケット(1985年)、カバーデザイン=江上計太、印刷・発行=IAF
- ・「d-ART #0」、付録「80°-F」Chronology(1986年7月)、監修=宮本初音、発行=WA-HA
- ・「EVE'S LAST APPLE」ハガキ(1986年)
- ・「ARTIST'S NETWORK 1987 アーティスト・ネットワーク—福岡+群馬+北海道」(1987年)、発行=Artist's Network 1987実行委員会
- ・「木塚忠広・高向一成展」ポスター(1988年)

15. 高向 一成 TAKAMUKU Kazunari

1949年福岡市に生まれる。九州産業大学芸術学部在学中の1969年「全九州第1回野外実験ショー」(八幡市民会館)で初めてパフォーマンスを行う。1971年同行卒業。1975年ジャズ喫茶イヴの林檎を開業。1978年「〈意識・存在〉展(石橋市美術館)をはじめさまざまなグループ展に参加。1980、81年「方法の意志」展を企画開催(当館市民ギャラリー)。1986年、閉店が決まったイヴの林檎にて「EVE'S LAST APPLE」展を企画。1989年「GAS展」(ホテルリッチ博多)参加。1988年木塚忠広との連続個展(当館特別展示室B)。1990年「ミュージアム・シティ・天神」に出品。1991年作家の互助組織として「カレント・アート・エイド(CAA)」を立ち上げ、展覧会も開催。ガラスを主たる素材としたハードエッジの作品を制作し、ガラスやテレビを破壊するパフォーマンスを行う。

15 パフォーマンス記録映像、1990年10月7日

Performance video, October 7th, 1990

1990年「ミュージアム・シティ・天神」(スペースメディアMA、秀巧社)

16. 17. 阿部 守 ABE Mamoru

1954年東京都に生まれる。1980年東京芸術大学大学院修士課程修了。その後本格的作家活動を開始。1984年福岡教育大学に教職を得て福岡に移住。1985年「変貌するイメージ—ジョン」(福岡県立美術館)出品。1987年「国際鉄鋼彫刻シンポジウム—YAHATA '87」(東田高炉記念広場、北九州市)参加。1990年英国王立美術大学彫刻科PEP課程修了、DIPLOMA取得。1994年「第4回アジア美術展」ワークショップコーディネーター、1995年「第7回バンガラデシュ・ビエンナーレ」最高賞受賞。2000、2009年文化庁覇権芸術家在外研修員としてロンドン、ノルウェーに滞在。屋外作品も多く、代表的なものに1992年に設置された《風の門》(宗像ユリックス)がある。2002年「第3回21世紀の作家—福岡 阿部守展」(当館)。鉄を叩くという行為と、さまざまに質感を変える素材としての鉄を、場や空間に結びつけたインスタレーションに取り組む。

16 プロジェクト・スケッチ

Sketch for a Project

1990

鉛筆・紙

pencil on paper

79.1x111.8 1-D-358 作家寄贈

1990年「ミュージアム・シティ・天神」出品作《我が内なるボグ》のためのドローイング

17 The Hide

1995

水彩、鉛筆・紙

watercolor and pencil on paper

90.1x91.1 1-C-227 作家寄贈

1995年 第7回バンガラデシュ・ビエンナーレ出品作のためのドローイング

18. 栞野 よう子 KUWANO Yoko

1967年福岡市に生まれる。1988年九州デザイナー学院卒業。フリーランスのイラストレーターとして活動後、1989年

「GAS展」(ホテルリッチ博多)、「南風—九州コンテンポラリーアートの冒険」(IMS) 出品。1990年熊本で初個展開催。「ミュージアム・シティ・天神」出品。1990年代の福岡現代美術の一翼を担う若手作家と目された。1994年「七つの対話」(福岡県立美術館) 出品。1997年個展「一滴の水」(三菱地所アルティアム) 開催。1994、1999年「VOCA展」(上野の森美術館) 出品。2000年「第2回21世紀の作家—福岡 栗野よう子展」(当館)。原初的感情を鮮烈な色彩で描き、展示空間にあわせたインスタレーションとして見せる。

18 血のヴァリエーション

Variation of Blood
2000
油彩・画布、額縁
oil on canvas and frames
サイズ可変 size variable 1-A-516 作家寄贈
2000年「第2回21世紀の作家—福岡 栗野よう子展」(当館)

19. 江上 計太 EGAMI Keita

1951年福岡県大牟田市に生まれる。1977年東京藝術大学を卒業し福岡に戻る。ミニマルミュージックに影響を受けた幾何学的形態による版画、ドローイングを制作。1978年「版画教室」(IAF芸術研究室)に参加。1984年「スクランブル・プラン」(福永アパート)参加。1985年「変貌するイマジネーション」(福岡県立美術館)、1987年「ARTIST'S NETWORK 1987」(佐賀町エキジビット・スペース、東京)参加。1991年「第5回バングラデシュ・ビエンナーレ」出品し、最高賞受賞。1990、1992年「ミュージアム・シティ・天神」参加。1995年ガスコーニュ・ジャパニーズ・アート・スカラシップでモンフランカン(フランス)滞在。1999年福岡県文化賞受賞。2002年「第4回21世紀の作家—福岡 江上計太展」(当館)。モダニズムの造型理論はもとより記号論、音楽理論から独自のガレージ理論を展開し、紙や糸、ベニヤ板といった軽快な素材を用いたインスタレーションを展開。パブリックアートも手がける。

19 Patrio-scud

2003 (1991着想)
アクリル、合板
Acrylic, plywood
380.0x207.8x188.3 1-G-55
1991年「Patrio-scudo」シリーズでの再制作

20. 21. 和田 千秋 WADA Chiaki

1957年大分市に生まれる。1982年九州産業大学芸術学部美術学科卒業。在学中も「版画教室」(IAF芸術研究室)が主宰する「現代美術研究会」に参加。1980年個展(アートスペース猿、福岡市)以降、さまざまなグループ展に参加。ミニマリズムやコンセプチュアルアートに影響を受けた作品を制作。1984年「スクランブル・プラン」(福永アパート)、1987年「ARTIST'S NETWORK 1987」(佐賀町エキジビット・スペース、東京)参加。同年、長男が脳障害をもって生まれ、子どもの機能訓練に専念するため活動休止。1992年個展「障害の美術」(天画廊)で作家活動再開。以後、障害をテーマに「現代美術のリハビリテーション」をうたい、文章や訓練器具を取り込んだ「障害の美術」シリーズを展開。1994年「七つの対話」(福岡県立美術館)、1997年「しなやかな共生」(水戸芸術館現代美術センター)などに参加。2008年「第8回21世紀の作家—福岡 和田千秋展」(当館)。2000年より茶道家・中村海坂と美術家・坂崎隆一とのコラボレーションによる「障害の茶室」を発表、2014年「釜山ビエンナーレ2014」出品。

20 歩きたい (「障害の美術Ⅸ—ハネがほしい」より)

I Want to Walk (from "the Art of Different Abilities IX- I Want Wings")
2003
アクリル・画布、靴
acrylic on canvas, shoes
91.0x72.7 1-A-606 個人寄贈
2003年「障害の美術Ⅸ—ハネがほしい」(共同アトリエ・3号倉庫)

21 私を私自身から救ってください (「障害の美術Ⅹ—祈り」より)

Please Save me from myself (from "the Art of Different Abilities X - Prayer")
2007
油彩、アクリル・画布
Oil and acrylic on canvas
193.0x130.3 1-A-605
2008年「第8回21世紀の作家—福岡 和田千秋展」(当館)

22. 大浦 ころお OURA Kokoro

1960年東京都に生まれ、福岡市で育つ。武蔵野美術大学油絵学科卒業。1985年より染織技法を用いたインスタレーションを発表。1987年「ARTIST'S NETWORK EXPANDED」(福岡県立美術館)、1990年「ミュージアム・シティ・天神」に参加。拠点を福岡へ移し絵画制作を展開。1996年「VOCA展」(上野の森美術館)。同年より大画面の水彩画に取り組み、2002年「現代日本の水彩表現 にじみ、ぼかし、重ね、線」(渋谷区立松濤美術館)、2003年「福・北 美術往来」(当館・北九州市立美術館)に出品。2011年「第9回21世紀の作家—福岡 大浦ころお展」(当館)。水彩画独特のみずみずしい色彩とにじみを生かし、身体性をはらんだ激しいストロークによって、世界のせめぎあう力を表現する。

22 のびひろがっていく身体 14

Expanding Body 14
2002
水彩、生麩糊、鉛筆・紙
watercolor, glue and pencil on paper
233.2x152.0 1-C-283 作家寄贈
2002年「大浦ころお展 のびひろがっていく身体」(福岡県立美術館)

23. 浦川 大志 URAKAWA Taishi

1994年福岡県宗像市に生まれる。2017年九州産業大学芸術学部美術学科卒業。2013年初個展(IAF SHOP*、福岡市)。以後精力的に発表を重ね、展覧会企画も行う。2015年「黄金町バザール」(横浜市)に参加。2015年「第24回英展」優秀賞受賞。2016年個展(ギャラリーおいし)、2017年「筑後アート往来」(九州芸文館)参加。2018年「VOCA展」(上野の森美術館)で大原美術館賞受賞。2019年に参加した主な展覧会は「浦川大志・加茂昂・竹内公太『絵画』」(SNOW Contemporary, 東京)、「浦川大志 & 名なき実鳥 二人展『終わるまで終わらないよ』」(熊本市現代美術館)。デジタルネイティブの感性をアナログな絵画に落とし込み、マチエールとグラデーション、レイヤー構成を駆使してイメージの表層を追究する。

23 Saida-wo nominagara tochi wo aruku.

Park, passing through a lost land
2017
アクリル、ジェッソ・綿布、パネル
acrylic, gesso on cotton, panel
360x480 1-A-683
2017年「筑後アート往来」(九州芸文館)

九州・現代美術の動向展

菊畑茂久馬が西日本新聞記者の谷口治達とフクニチ新聞記者の深野治とともに1967年に企画し始まった、九州の現代美術家に焦点を当てた展覧会。低迷する美術状況を打破する企図のもと、既存のシステムや権威によらず新たな価値を創造すべく、美術家たちの手弁当で作り上げる形で、企画主体を変えながら1971年の第5回まで開催。

WORK PARTY STUDIO

1974年九州産業大学大学院に芸術研究科修士課程が設置され、清水国夫および廣末勝巳を講師に据えたデザイン科に現代美術を志す若者が多く集まった。1975年、永崎通久、元村正信、在学学生、そして山崎直秀ら卒業生により、結成。コンセプチュアルアートの手法を取り入れた作品を制作し、1977年までにグループ展や個展を開催した。

ゾディアック

「アーティストユニオン」にかわり九州派の旧メンバーとも親交のあった長谷川清と村上勝が、新世代による活動の必要を感じ、1976年の「スイッチ・オブ・テン」「アート・イン」を経て、木塚忠広、仙頭利通、小川幸一、田崎六郎、伊藤茉莉とともに1977年結成。2回目展より首藤マヤ、井上善種、3回目展より井上彰、富安大輔が参加。活動期間を1年に定め、展覧会を開催し福岡に現代美術の状況を立ち上げようとした。

版画教室／IAF芸術研究室／IAF SHOP*

美学校で学び1971年に福岡に戻った山野真悟が1975年に福岡市谷で開設した銅版画教室は、教室としての機能のみならず現代美術に関心のある作家を集め、美術理論研究・実践の場にもなった。1977年批評誌『世紀美術評論』を発行。1978年に福岡市薬院に移転し、1982年にはIAF芸術研究室に改称。モダニズム美術理論の習得を目指す研究会を行うほか、さまざまな展覧会を企画。他の地方都市在住作家との交流展も実施。2000年にIAF SHOP*と改称し、ギャラリー兼オルタナティブスペース兼バーとして活動。

イヴの林檎

1975年高向一成が福岡市博多駅前にオープンしたジャズ喫茶。福岡市の美術家や文化関係者の交流拠点として機能した。1986年建物解体に伴う閉店に際し、「EVE'S LAST APPLE」と題し2階建ての建物の内外すべてを使用したインスタレーションによる展覧会を開催（高向一成企画）。和田千秋、板山信一、江上計太、木塚忠広、キンタロ、高向一成、宮本初音、山中理恵、山野真悟、渡辺宏が参加。批評家・藤井雅美を招いたシンポジウムも開催した。

スクランブル・プラン

1984年、解体直前のアパートを舞台に開催されたインスタレーション展。美術館やギャラリーといった制度化された空間の外でインスタレーションを展開する展覧会としては、福岡における最初期の例。渡辺宏と宮本初音のユニットWA-HAが企画し、IAFが後援。参加作家は、江上計太、林浩、板山信一、キンタロ、木塚忠広、宮本初音、和田千秋、渡辺宏、山野真悟。

ARTIST'S NETWORK

IAFをはじめとする各地域の美術家のネットワークが生んだ展覧会。1987年1月、東京の佐賀町エキジビット・スペースに、北海道、群馬、九州の美術家23名が集まり開催。同年7月には、総勢

51名の参加者による拡大版の展覧会「ARTIST'S NETWORK EXPANDED」がIAF芸術研究室と福岡県立美術館の共同主催で実現した。九州枠の参加者は阿部守、井川惺亮、板山信一、伊奈新祐、江上計太、木塚忠広、小丸丸昌世、高向一成、林浩、宮川敬一、宮本初音、山中理恵、山野真悟、渡辺宏、和田千秋。その後福岡に拠点を移す牛島智子、大浦こころも東京から参加。

国際鉄鋼彫刻シンポジウム

近代製鉄発祥の地である北九州市の新日本製鐵八幡製鉄所東田高炉記念広場で開催された国際彫刻展。彫刻家の母里聖徳が千草ホテル（北九州市八幡）の経営者・小嶋一碩に鉄の彫刻展の開催を持ちかけ、地元企業と行政の協力を得て実現。美術評論家の中村信夫の紹介で英国の彫刻家フィリップ・キングを招聘したほか、阿部守、母里聖徳、福田篤夫、デイヴィッド・マック、村岡三郎、中西久吉、西雅秋、祐成政徳、高山登が参加。1993年に第2回展を開催（参加作家は母里聖徳、フランク・ステラ）。本シンポジウムをきっかけに、1989年から海外作家を招いた若手美術家向けのサマースクール「CASK現代美術サマーセミナー・イン・北九州」が開始。1995年までに7回開講され、のべ35人の講師、297人の受講生を迎えた。

ミュージアム・シティ・天神

「EVE'S LAST APPLE」「スクランブル・プラン」「GAS展」など、ギャラリースペース以外の場所を使った展覧会を特徴のひとつとした1980年代の福岡のアートシーンと、天神地区の再開発と商業ビルの積極的な文化参加を背景に、1990年「美術が都市の中で流通するシステム」の構築を目指してスタート。九州の作家だけでなく、国内外の著名作家も参加作家に名を連ねた。1990年の第1回から隔年で2002年まで開催。1991年には中国前衛美術家展「非常口」も開催。ドイツのドクメンタやミュンスター彫刻プロジェクトを手本にスタートしたこのミュージアム・シティ・プロジェクト（MCP）は、日本における都市型アート・プロジェクトの先駆といえる。

九州コンテンポラリーアートの冒険

九州・山口出身および在住の1953年以降に生まれた若手美術家を対象とした展覧会。1989年にスタート。商業ビルであるIMS全館を展示会場に、参加作家がインスタレーションを発表した。1991年から公募展となりvol.10まで開催。1991年からは、過去出品作家の中から将来性のある美術家を選抜し「三菱地所アルティアム イントロダクションシリーズ」と題し、年に一度個展開催（個展を行った作家：宮川敬一、草野貴世、広橋勲、山出淳也、富永剛、栗野よう子、耘野康臣、安部泰輔）。1999年開催の「九州コンテンポラリーアートの大冒険」は10周年記念展として過去出品作家から選抜された8名（鈴木淳、栗野よう子、草野貴世、中村哲也、耘野康臣、宮川敬一、ナターシャ・ヌジック）による展覧会となった。

共同アトリエ・3号倉庫

2000年12月に福岡市那の津倉庫にオープン。福岡市在住の匿名男性が福岡の文化を支えるべく、若い美術家に制作兼展示の場を提供した。2001-2007年は風倉匠が総合アートディレクターを務め、2008-2011年は酒井忠臣が同役割を担った。作家は1年更新で最大3年まで在籍でき、幕を閉じる2011年4月までに21名の美術家（安部貴住、河口彩、高田麻衣子、成田鐘哲、平岡昌也、森田加奈子、長峰麻貴、寺江圭一朗、梶田さつき、山崎祐子、城野敬志、大木千波、大木真理絵、三輪恭子、ソン・ジュンナン、南健吾、荒瀬哲也、東島哲、吉永有里、浜田麻希、山内光枝）が巣立っていった。